

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 24 日現在

機関番号：32639

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381044

研究課題名(和文)地球時代におけるソクラテ斯的対話の可能性に関する教育学的研究

研究課題名(英文)Pedagogical study on the possibility of Socratic dialogue in the planetary era

研究代表者

太田 明(Ota, Akira)

玉川大学・文学部・教授

研究者番号：30261001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は哲学教育とそこで重要な役割を果たしている「ソクラテ斯的対話」の可能性を次の三つの方向から検討することである。

(A)レオナルド・ネルソンの人と行動を明らかにし、さらネルソンの「ソクラテス的方法」の特徴を明らかにした。またグスタフ・ヘックマンによる「ソクラテ斯的対話」を検討し、ネルソンとの異同とその理由を明らかにした。(B)ユネスコの哲学教育に関するの宣言を分析し、その方向性を検討した。(C)海外学会において批判的思考とソクラテ斯的対話に関する研究発表を行った。また連携研究者と共催した研究会に海外からの研究者を招き、国際対話を行った。さらにSDのワークショップでその方法を実践的に検討した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to investigate the trend of philosophy education and to examine the possibility of "Socratic Dialogue" in the "planetary age" from the following three directions. (A) "Socratic method" or "Socratic Dialogue" (SD) theory advocated by Leonardo Nelson, (B) philosophy education trend, especially that of UNESCO and (C) philosophy education practice such as SD.

(A) In a series of papers, I revealed Nelson's career, who is sunk mostly in oblivion today, and clarified the characteristics of Nelson's Socratic method" based on his lecture of the same name, and compared it to Gustav Heckmann's "Socratic Dialogue". (B) I analyzed declarations on UNESCO's philosophy education and examined its direction. (C) I made research presentations on critical thinking and Socratic dialogue in academic meetings in Japan and abroad. I conducted workshop co-hosted with a research collaborator and I participated in the SD workshop and examined the facilitation method of dialogue.

研究分野：社会科学

キーワード：ソクラテ斯的対話 レオナルド・ネルソン 子どもの哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 哲学教育はもちろんさまざまな領域の教育で対話を用いた「ソクラテス的方法」が用いられている。ソクラテス的方法の研究はソクラテスないしプラトンの哲学・哲学思想の研究として行われるのが一般的であり、「方法」そのものの検討が多くない。それを真正面から取り上げ、また自らの哲学方法としたのが20世紀初頭に活動したゲッチンゲン大学の哲学者レオナルド・ネルゾン (Leonard Nelson, 1882-1927) である。ネルゾンは、新カント派の哲学ヤコブ・フリードリッヒ・フリース (Jacob Friedrich Fries, 1773-1843) の批判哲学の方法を受け継ぎ、その方法によってソクラテスの思想を解釈して自らの「ソクラテス方法」を提唱した。それは1922年の講演「ソクラテス的方法」で雄弁に述べられている。また、ネルゾンは批判的方法を用いて認識論、倫理学、政治哲学を開拓するとともに、精力的に政治運動に関与した。また、カント哲学とソクラテス的方法を用いる田園教育舎を設立した。こうした活動にも関わらず、ネルゾンの仕事は「ソクラテス的方法」以外にほぼ忘れられている。それはなぜか。また、批判哲学、ソクラテス的方法と彼の倫理学と政治学との関連、さらに政治運動との関連はいかなるものか。こうした問いが生じる。また、我が国では「ソクラテス的方法」の理論的背景も十分に紹介されていない。

(2) 哲学教育という面では、最近、「子どものための哲学：P4C」が取り上げられることが多い。P4Cはアメリカの哲学者マシュー・リップマン (Mathew Lipman) が提唱し、今日では世界各国で実践されている。1997年のユネスコの報告書『哲学：自由の学校』でもP4Cに大きなスペースが割かれている。P4Cはいわゆる哲学の教育ではなく、子どもとの対話を通じた哲学教育の方法である。P4Cの運動は極めて興味深い。ソクラテス的対話との関係や相違はどこにあるかなどが十分に明らかにされているわけではない。P4Cの啓発を含めて、ユネスコは2005年に「哲学教育宣言」を出す、その後上記の報告書を公表し、さらに地域ごとの哲学教育に関してレポートを作成した。こうしたユネスコの哲学教育促進の目的やその背景を明らかにする必要があると思われる。

2. 研究の目的

上記の状況を踏まえて本研究は次の3点を目的とした。哲学教育およびそこで重要な役割を果たしている「ソクラテス的対話」の可能性を次の3つの観点から研究することである。(A) 1920年代にネルゾンが開発した「ソクラテス的方法」(die Sokratische Methode)、ネルゾンの弟子グスタフ・ヘックマン (Gustav Heckmann, 1889-1996) による「ソクラテス的対話」(das sokratische Gespräch) の構想の検討。(B) ユネスコによる一連の哲

学教育促進に関する宣言などの目的やその背景の検討。(C) 哲学教育やソクラテス的対話の実践に参加、およびその指導技法を研究。

3. 研究の方法

(A) に研究期間全体と通して、文献資料の検討を行った。(B) は1年目・2年目に、文献研究・実地調査を行った。(C) は研究期間全体を通して、海外からの研究者の招聘、学会・ワークショップへの参加を通して実践的に行った。

4. 研究成果

(A) ネルゾンの人物に関しては我が国では紹介がない点を鑑み、論文において、ネルゾンの経歴を明らかにし、ネルゾンが忘却されている理由を検討した。また、ネルゾンのメルズンゲンのヴァルケミュレ田園教育舎のあとを訪ねた。田園教育舎は1935年にナチスドイツによって閉鎖され、解体された。戦後は再建されず、今日は跡形もない。ただ残された写真から読み取れる景観だけが確認できた。ただし、ネルゾンの遺骸が埋葬されている旧ユダヤ人墓地がメルズンゲン郊外に残されている。

論文ではネルゾンの講演「ソクラテス的方法」(以下「講演」) を逐語的に検討し、ソクラテス的方法の特徴を明らかにした。

ネルゾンにおいては哲学・政治・教育は密接に結びついている。論文でも指摘したことだが、ネルゾンは自らの学校経験に基づき、また政治運動との関わりで、政治指導者の育成という観点で教育の革新に多大な関心を懐いていた。田園教育舎の設立者ヘルマン・リーツに大きな影響を受けた。ゲッチンゲン大学の哲学を努めながら、まず国際青年同盟 (der Internationale Jugendbund: IJK) を、後には国際社会主義的闘争同盟 (der Internationale Sozialistische Kampfbund: ISK) を設立し、政治活動に奔走した。政治的立場は「倫理的社會主義」(ethischer Liberalismus) に属するが、リベラルの退潮のなかで、政治指導者の育成の必要を強く感じるようになった。ここに哲学・政治・教育が結びつく。

ここからわかるように、ネルゾンの教育への問いは政治の優位によって強く彩られている。これは1920年代の「指導者教育」(Führerziehung) という考え方に示されている。ネルゾン死後のドイツの政治状況を鑑みれば「指導者教育」とは意味深長である。当時の政治状況に直面したネルゾンの構想は、よい教育を受けた人間を形成し、彼らに政治指導を委ねるべきであるという一種のプラトンの政治体制である。ここからはネルゾンの「民主主義」の理解がかなり制約されたものであることが推測される。

他方、ネルゾンは自分の理念を言葉で述べるだけではなく、それを実現するために、1924

年にヘッセン州ヴァルケミュレの田園教育舎を入手し、経営した。自らの政治団体(IJK, ISK)を担う若い成人のための幹部学校を設立して政治教育を行い、さらに小学校を設立した。この学校の特徴は「方法論的観点では…ソクラテス的方法の思想と、ドグマ的教授を含めたあらゆる身体的・精神的強制の絶対的排除である。…哲学的基礎はすべての本質的な点でカントの哲学…」である。

ネルゾンの教育学は、倫理的に基礎づけられた人格形成を目的としている。しかし、同時に上述のように、服従に方向づけられた「教育上の権威主義」に徹底的に対決する。したがって、被教育者の固有の権利と教育の指導的役割との弁証法的関係が展開される。これは、ネルゾンに言わせれば、「知的陶冶を含んだすべての陶冶の自己活動」によってのみ成り立つ。その意味での「人間精神の自己活動の発展」を促すのが「ソクラテス的方法」である。

ネルゾンによるソクラテス的方法は、ソクラテスの思想を引き継いでいる。だが、いくつかの新機軸を含んでいる。論文 ではこれを詳細に検討した。

プラトンのソクラテス的対話は二人の人物、ソクラテスと相手によってなされる。対話はほとんどソクラテスが主導して質問し、対話相手はときどきそれを確認し、決まり文句で応える役割しか与えられていない。こうした対話には役割の非対称性がある。しかしこの非対称性によって対話は産婆術的效果を発揮する。ソクラテスの確信と問いとが対話の機動力である。こうしたソクラテスの対話に対しては、ソクラテスは自分の問いと議論によって対話に決定的な思想を持ち込み、相手が「自分自身で」認識を形成すべしという自らの要請を裏切っているとの批判がなされる。あるいは、ソクラテス的対話を、問いによって何かを教える方法と同一視するならば、「ソクラテス的カテキズム」のように執拗に質問を繰り返すことによって教師は自らの思う方向に学生の思考を向けることも可能になる。それでは、対話を用いながら、学生自身で認識に至らせることはどうすれば可能か。

ネルゾンは「講演」のなかで「パラドックス」とも言うべき「教育学の根本問題」を指摘する。「教育の目的が理性的自己決定にあるとすれば、つまり、人間は外的影響によって規定されるのではなく、むしろ自分自身の洞察によって判断し行為する状態にあることとすれば、…ある人間に外的に影響を与えることによって、その人間が外的影響を受けないようにするにはどうして可能かという問題である。」

「ソクラテス的方法」におけるネルゾンの新機軸は、第1に同等な複数の対話参加者による対話を通しての思想の交換としたこと、第2に対話指導者は「教える」ことから完全に身を引き、対話の進行だけに関わる進行役と

した点である。

そしてこの新機軸が「パラドックス」の解消につながる。ネルゾン自身は対話の発話上の分析を行っていないが、対話における「問い」の役割を分析することでこの点が明確になる。

通常、問いは「補充疑問」と「決定疑問」とに区分できる。前者は、不完全な文を発話し、求めている補足が回答によって補足されることで初めて一つの意義を疑問文である。後者は対話相手に賛否の決定を要求する疑問文である。補充疑問では、どのように補充するかは問われた者に委ねられるが、補充の範囲は予め画定されている。決定疑問は諾否を求めるが、諾否が答えられない場合には自分の無知や無理解を告白するしかない。対話篇を見れば、ソクラテスはこの二つの形式の問いを駆使して対話を統制していることがわかる。一人対一人の対話では、決定疑問か補充疑問を用いなければ対話は進行しない。そしてこの形式の問いは、言わば回答の内容を予め含んでいる。一人対一人の対話は内容に対する問いを進行の手段としているのである。それに対して、単に対話の進行を統制するだけで、内容に関わらない問い、「制御疑問」がある。この種の問いは、対話内容には影響しないが、対話過程には影響を与えるという積極的意味をもっている。

ネルゾンの新機軸は、対話参加者は「補充疑問」と「決定疑問」を用いて対話を進行させ、対話内容を深めるが、指導者は対話内容に関わらない「制御疑問」だけを用いて、対話内容に影響を与えずに対話の進行に徹することを求めた点である。こうすることによって、指導者は対話内容に関与せずに、参加者たちの思想内容に外部から影響を与えない。それに対して対話の内容に関して参加者たちは自発的に相互に思想を交換し刺激しあうとうかたで共同に思考するし、同時に自分の思考を深める。このようにして「パラドックス」は解消される。

また、ネルゾンの方法の特徴は、ソクラテス的方法を哲学実践の方法、認識獲得の方法として、フリースの「批判的方法」に従いつつ、「抽象の遡及的方法」(die regressive Methode der Abstraction)と捉える点である。その基本的な考え方は次の通りである。われわれの日常の判断は具体的判断であるが、その中にはすでに普遍的原理が、ぼんやりと曖昧な形でではあるが、含まれている。いわば既に知っている。むしろ既に知っていることが前提となって判断を下せるのである。しかしこれはすぐには露わにならない。それが遡及の過程である。この過程は、具体的なものからより普遍的なものに至る。具体的なものから普遍的なものに至るという点では帰納である。しかし、この過程は推論ではなく、分解(分析)である。遡及において後段の判断は前段の判断に比してより原理的になる。具体的なものにつきまわっていた夾雑物が

取り除かれるからであり、得られたものは具体的判断の根本になっているはずである。だからこの過程は「抽象」でもある。「われわれは帰納によって所与の現象に対する原因を知るが、抽象によって所与の判断の前提を知るのである。」ネルゾンの「ソクラテス的方法」はこの遡及的抽象の方法を対話に適用したものと解釈しているように思われる。ただ、それだけでは、抽象の遡及的方法是原理を先取りして具体的例を解釈し、そこから原理を抽象するという論点先取りの誤謬ではないかとの批判を受ける可能性がある。ネルゾン（とフリース）は、「それ自身で確実であり、その確実性を外の何かから借りてくるのではない」「直接的認識」(unmittelbare Erkenntnis)に求める。その意味で、これは「直接的認識の真理へと向かう理性の自己信頼の原理」(das Prinzip der Selbstvertrauen der Vernunft auf die Wahrheit ihrer unmittelbare Erkenntnis)に基づく。特に倫理的原則が帰納的には求められないとすれば、その探求においてこの原理が重要になる。しかし、直接的認識の本性は何か、どのようにしてそれを知るのかという難問が生じる。哲学方法としてのソクラテス的方法はここで大きな問題をかかえることになる。論文ではその点までを追求する事はできなかった。今後の課題となるさて、ネルゾンは講演で、上述のような自らが行っているソクラテス的方法の規則に触れている。参加者は自らの経験に基づく問題に対して、専門用語に頼らずに明瞭に述べ、「思想を共同体の中で検証する」ことが求められる。しかし最も重要な点は、対話指導者は対話の内容に関わる一切の発言を控えることであり、そうした指導者のやり方に対応する学生の側の「意志の訓練」である。ネルゾンが実際に行っているソクラテス的方法の記録はほとんど残っていないが、ある研究者によればそれは「ネルゾンによって自分で考えることを強制される」経験であるかのようなと評される。ネルゾンは自分自身の考えを参加者に強制するのではなく、参加者に自分で考えることを強制したのである。上述の論文の内容は学会発表で発表した。

こうしたネルゾンのソクラテス的方法は、彼の学生であったグスタフ・ヘックマンによって「ソクラテス的対話」として今日に継承される。論文ではヘックマンとネルゾンの異同を明らかにした。ゲッチンゲン大学で物理学を研究する学生だったヘックマンはネルゾンの講演「ソクラテス的方法」を聞き、自らの進路を変更してヴァルケミュレ田園教育舎の教師となった。ヘックマンはヴァルケミュレ田園教育舎の責任者ミンナ・シュペヒト(Minna Specht)の指導のもとに、ソクラテス的方法で用いた教育を行った。ヴァルケミュレが

閉鎖された後、ミンナ・シュペヒトとともに小学生を連れてデンマーク、イングランドに亡命した。また、反ナチスの地下抵抗運動を援助した。戦後はドイツに戻り、ハンブルク教育大学で「ソクラテス的対話」を用いた哲学教育を実践するとともに、さまざまな場で「ソクラテス的対話」を行い、その指導者を数多く育てた。

ヘックマンは基本的にはネルゾンの「ソクラテス的方法」を継承しながら、いくつかの点で重大な修正を加えた。最も重要な修正点は、第1に、ネルゾンにはなかった「教育対話」を持ち込んだことに、第2にソクラテス的対話の方法の指導上の留意点をまとめ、規則をはっきりさせた点にある。

ヘックマンの本領はソクラテス的対話の実践であって、著作はごく少ない。しかし、その著作『ソクラテス的対話』は今日の実践家にとって重要な手引となっている。またネルゾン哲学に関する短い論文はその長所短所を的確に指摘し、ネルゾン研究にとって不可欠なものになっている。

ネルゾンの「ソクラテス的方法」では、そこに参加する学生が自発的に自らを厳しく律することがあってはじめて「教育のパラドックス」が解消できる。あえて言えば、「教育的配慮」はそこに入り込む余地はない。それに対してヘックマンは、「最広義におけるソクラテス的方法は、人間が真理の根拠について共同の思考によって問題に接近しようとするどんな場所でもどんな時でも実践される」との定義を与えるとともに、その「特殊な一形式がソクラテス的対話」であるとして「教育対話」に重要な位置を指定した。ソクラテス的方法の教育的側面を重視したのである。

さらにヘックマンはソクラテス的対話において指導者がなすべき具体的措置を明示的に与えた。それは1. 差し控えの命法2. 具体的なものへの定位、3. 対話の援助、4. 問いへの集中、5. 合意をめざす努力、6. 指導上の注意点である。さらに、対話に関する対話という「メタ対話」を導入した。こうした措置が今日における「ソクラテス的対話」を行う際の規則となっている。

ヘックマンにあっては、上述の6つの具体的措置にある「合意をめざす努力」というネルゾンには見られない要素が入っている点が重要である。それはヘックマンがネルゾンに従いつつネルゾンを批判的に捉え、「寛容」を重視したこと由来する。そしてその背景には第2次大戦間の亡命経験である。寛容な社会では「民主制は多数決原理という形式的原理以上のもの」であるが、「ネルゾンは... 寛容という特徴をもつ社会を経験することは一度もありませんでした。彼にとって寛容とは 信念の欠如と偽善の発露 に他ならなかったのです。」

(B) 哲学・倫理学の分野で哲学教育や倫理学

教育について関心が高まっている。それも、大学などの高等教育段階での、専門的学問としての哲学や倫理学の教育ではなく、それ以前の学校教育段階、つまり小・中・高等学校での哲学教育や倫理学教育である。さらに、道徳の時間や教科科目としての倫理だけではなく、その枠にとられない哲学教育や倫理学教育である。先駆的にその実践を行ってきた人びとがあったことも重要である。まず、アメリカ合衆国で早くから「子どものための哲学」(Philosophy for Children:P4C)に取り組んできたマシュー・リップマン(Mathew Lipman, 1922-2010)が挙げられる。

それだけではなく、ヨーロッパ諸国でもさまざまなかたちで哲学教育・倫理学教育が行われてきた。これらに、共通するのは、哲学者の思想や哲学体系の教育や学習・研究ではなく、自分で考える という意味での「哲学」、つまり本来の意味での「哲学実践」(philosophize, philosophieren)とその教育実践を主たる活動にしている点である。リップマンのP4Cに関しては学会発表 と論文で検討したが、「必要なのは哲学ではなく哲学することだ」という考え方はカントに由来しネルズンにも共通するものである。

さらに、この運動はより広く視野で見れば、今日の社会における重要な教育課題に関係している。第一は、民主主義のもとでの市民性の涵養であり、第二は、知識基盤社会における一般的スキル(general skills)のひとつとしての批判的思考(critical thinking)能力の育成である。両者は密接に関係していることは容易に想像しうるが、完全に一致するわけでもない。市民性涵養には、読・書・算というような基礎的リテラシーだけではなく、批判的思考が不可欠であるが、市民性をとまなわれないとは言わないまでも、それが限定されてしまった批判的思考というものも想定しうる。両者がどのように関連し、また政策化されるかが問われてこよう。

論文 では、このような観点からユネスコにおける哲学教育促進の足跡をたどった。ユネスコは 1945 年の設立時から哲学のプログラムを持っていた。しかし、1951-2 年と 1978 年の調査以降、目立った活動はなかった。ユネスコが哲学教育に関して積極的に活動を再開するのは 1994 年以降である。1994 年に 51 年の追加調査を行った。1995 年 2 月 15-16 日、パリで催された国際的研究の日(the International Study Days)に ユネスコによって組織された「世界における哲学と民主主義」("Philosophy and Democracy in the World")で「哲学のためのパリ宣言」("Paris Declaration for Philosophie") (以下、「パリ宣言」と略称)が採択された。これ以降、ユネスコの哲学プログラムは活発化してくる。その意味で「パリ宣言」はメルクマールと言ってよいだろう。国際的な哲学文化の普及という目的を目指して、子どものための哲学の促進、哲学研究のための地域間のネット

ワークの設立、哲学に関するマルチメディア百科事典などが現実化してくる。1998 年には、「子どものための哲学」について、14 カ国から 18 名の専門家を招集した専門家委員会がユネスコ内に組織され、その会合(1998 年 3 月 26-27 日)の報告書が提出された。専門家委員会では、子どものための哲学の意義、目的、方法などが検討され、「子どものための哲学を促進し、その経験を共有するために、国家間のネットワークが必要である」との勧告がなされた。毎年 11 月第 3 木曜日がその開催日と定められた。これは哲学と哲学教育のための大きなはずみとなった。その後、学術研究のための地域間ネットワークとして、ユネスコ内に「哲学の地域間対話」(Interregional Philosophical Dialogues)(2004-5)というプロジェクトが立ち上がった。また、2005 年 4 月、ユネスコ理事会は哲学に関するユネスコの「領域間戦略」(Intersectorial Strategy on Philosophy)を採択した。

こうした活動をうけて、2007 年にユネスコは広範な報告書『哲学 自由のための学校』を公表した。その戦略は上述の「領域間戦略」ですでに述べられていたが、およそ 1. 世界の問題に直面する哲学：対話、分析、現代社会を問うこと、2. 世界における哲学の教育：批判的反省と自律的思考、3. 哲学的思考と研究の促進の 3 つからなっている。

さらにその後、2007 年に「女性哲学者の国際ネットワーク」の設立、2010 年に一連の「哲学教育について地域ハイレベル会議」(UNESCO Regional High-level Meeting on the Teaching of Philosophy)の開催、子どものための哲学国際ネットワークとジンジュ(晋州)宣言(2011)が続く。

以上のような経年的な動きをもとに考察すると、『哲学：自由の学校』の意図とは次の点にあると考えられる。ユネスコ憲章は、正義、自由、平等、連帯という民主的理想を掲げ、またこれらの諸原則が平和の構築において根本的要因であると述べている。個人の、そしてコミュニティの意思決定を支えるツールの開発は人権の承認と手を携えながら進展してきた。そのために、哲学は実際、平和の文化のための基礎である自由の学校ということである。

(C) Colloque International Education et Formation: En jeux pour le Development Humaine(2014.04.25, Rabat, Morocca)において学会発表を行い、後に論文で公表した。そのなかで、今日普及しつつある MOOC による教育を取り上げ、MOOC においても対話という条件が不可欠であり、それを通してはじめて批判的思考の改善がなされることを述べた。

また、3rd International Workshop on Education and Culture in YOKOHAMA (2015.09.05-06, 神奈川県横浜市)を連携研

究者と共同で開催した。Giovanni Pampanini 氏(SISSU 代表)を講演者に迎え、氏の講演 "Right to Education, Global Democracy and Peace"に基づいて討議を行った。

さらに、ソクラテス的対話のワークショップ (2017.02.24-27, Würzburg, Germany)に参加し、対話実践および対話指導の方法に関して経験を積んだ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

太田明, 「トゥールミン・モデルと 応用論理学」, *Humanitas*, 2017, 第 8 号、pp.15-29, 査読無.

太田明, 「レオナルド・ネルゾンと 理性の自己信頼 (3)」, 『論叢』, 第 57 巻, pp.1-25, 2016, <http://libds.tamagawa.ac.jp/dspace/handle/11078/433>, 査読無.

太田明, 「責任概念の由来と展開(4)」, *Humanitas*, 2016, 第 7 号, pp.23-36, 査読無.

太田明, 「レオナルド・ネルゾンと 理性の自己信頼 (2)」, 『論叢』, 第 56 巻, pp.71-103, 2015, <http://libds.tamagawa.ac.jp/dspace/handle/11078/329>, 査読無.

太田明, 「批判的思考・ソクラテス的対話・ICT」, *Humanitas*, 2015, 第 6 号, pp.12-22, 2015, 査読無.

太田明, 「マシュー・リップマンと 子どものための哲学」, 『ハルシオン』, 第 5 巻, pp.26-34, 2015, 査読無.

太田明, 「レオナルド・ネルゾンと 理性の自己信頼 (1)」, 『論叢』, 第 55 巻, pp.105-129, 2014, <http://libds.tamagawa.ac.jp/dspace/handle/11078/216>, 査読無.

太田明, 「UNESCO と哲学教育」, 『教育文化政策研究』第 3 号, pp.59-70, 2014, 査読無.

[学会発表](計 5 件)

太田明, 「レオナルド・ネルゾンの「ソクラテス的方法」と知識の問題」, 日本教育学 第 75 回大会 一般研究発表(北海道大学、北海道札幌市), 2016.08.24.

太田明, 「ヴァルケミュール田園教育舎と「ソクラテス的方法」- レオナルド・ネルゾンの 理性の自己信頼 の教育学 -」, 世界子ども学研究会第 16 回研究例会(青山学院大学、東京都渋谷区), 2016.03.29.

太田明, 「レオナルド・ネルゾンと「ソクラテス的方法」」, 教育哲学会第 58 回大会(奈良女子大学、奈良県奈良市), 2015.10.11.

太田明, 「マシュー・リップマンと 子どものための哲学」, 世界子ども学研究会第 14 回研究例会(青山学院大学、東京都渋谷区), 2015.03.26.

OTA, Akira, "Improvement of Critical Thinking through Socratic Dialogue and ICT," International Conference of XXXX at Rabat, Morocco, 2014.04.27.

[図書](計 1 件)

水崎富美・太田明 他(編著)、三恵社、『地球時代の教育原理』、2016, 210(164-186).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田明 (OTA Akira)
玉川大学・文学部・教授
研究者番号: 30261001

(3) 連携研究者

水崎富美 (MIZUSAKI Fumi)
女子栄養大学・栄養学部・教授
研究者番号: 40510136